

「ハイデルベルク・ストラスブール派遣参加報告書」

京都大学文学部3回 米倉美咲

息を呑んだ。見上げるほどの天井にはあらゆる雑音が吸い込まれ、その漠たる空間にはステンドグラスの光が四方から落とされる。この重厚さ、この荘厳さは何に依るのだろうか。石材の重みか、歴史の重みか、信仰の重みか……。いくつもの問いと可能性が脳裏を掠めていく中、私は聖堂の奥、数段高くなったところに祭壇を見とめた。その時不意に、神は存在すると思った。そして、切実に救済を願いたくなった。

これが「ヨーロッパ」か、と思った。勿論、これが「ヨーロッパ」の全てではない。だが、この空間に長く身を置く人々と自分との間に、埋めようのない差異があることは痛いほど分かった。何を今更、と言われるかもしれない。「ヨーロッパ」と「アジア」、そして「日本」との間に大きな違いが存在するのは当然で、驚くことなど何も無い、と。確かに、言葉も気候も食べ物も、「何もかも」が違った。言葉を交わした学生たちは、私の全く知らない国で育ち、全く異なる問題意識を持っていた。首を傾げる場面も、徐に腑に落ちる事例も多々あった。だがそれらの差異は、言葉を尽くせば、論理的に捉えれば、理解し合える差異だった。理解したその先で、何かを語り得る差異だった。例え理解出来なかったとしても、それは議論をする時間の短さ故であり、私の語学力不足故だと言えた。でも、これは違う。どれほど努力したとしても、私にはきっと届かない世界なのだと悟った。

この衝撃に私が襲われたのはストラスブールのノートルダム大聖堂を見学した際のことであったが、宗教的「ヨーロッパ」世界に触れる機会は、このプログラムを通して何度もあった。例えば、ハイデルベルクでは、プロテスタントの教会を見学した（前述のノートルダム大聖堂はカトリックである）。質実剛健といった風の内装、小ぶりの十字架のみが捧げられた祭壇。内省的な空間のように映った。次に教会を出て商店街へ歩を向けると、一軒の店先の地面に、黄金の小さなプレートが数枚埋め込まれていた。目を凝らすと年号や名前、AUSCHWITZの文字が見える。慣れないドイツ語に苦戦している私に、通りすがりの人が一言、Jewishと教えてくれた。街が宗教の歴史を色濃く残す一方で、学生たちからは、「特別な行事の日には教会には行かないし、篤い信仰心がある訳でもない」という声を聞いた。

このような経験は枚挙に暇がないが、西洋史を学ぶ者としては、その一つ一つが「異国の過去」へと思いを馳せる糸口となり、それは必然的に「現在の私」へと帰ってきた。「ヨーロッパ」と自分、「アジア」と自分、「日本」、言語、宗教、学問と自分……。帰国した今でもこれらの問いは私の中で渦巻いている。答えは、おそらく、永遠に変化し続ける。日本で、そしてヨーロッパで、私が生活し、議論し、思考する限り。留学はその一つの間、その一つの間ではないかと思う。勿論、充実した学問環境や、それを支える資金的・人的援助、それを取り巻く人文学への寛容な空気、その中で呼吸しながら交わされる闊達な議論……。それらに学問の重みと煌めきを感じ、ある種の憧れを抱いたのも嘘ではない。だが、そう、もしかすると、この「憧れ」もまた一つの答えなのかもしれない。留学した私に尋ねてみたいものである。